

# 音 楽 科

## 1 音楽科が担う生徒の「学力」と「基礎・基本」

### (1) 音楽科の取組

本校音楽科は、学校教育目標を受け、教科の目標を『表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、音楽を愛好する心情を育てます』と設定し、音楽科の学習場面で、生徒一人ひとりに「二つのじりつ（自律・自立）している姿」が現れるよう、指導法・評価法の工夫・改善など、教師の授業力の向上に努めている。

### (2) 音楽科が担う生徒の「学力」と「学力向上」

四つの観点から音楽科の学力をみると次のようになる。

#### ア 音楽への関心・意欲・態度(観点1)

単に「好き」という情緒的なものではなく、題材の指導計画に基づく学習活動において、学習の対象(指導内容)にどうかかわっているかで評価する。

関心・意欲・態度は、学習を進めていく中で、他の観点と関連させながら育てていく。

#### イ 音楽的な感受や表現の工夫(観点2)

知覚すること・感じ取ることを、「音楽的な感受」という。

「知覚すること」の対象は音楽の構造的側面

(素材としての音、構成要素、構造要素の諸関連等)

「感じ取ること」の対象は感性的側面

(音楽の構造的側面が生み出す曲想、イメージ、感想等)

表現の工夫 = 音楽的な感受を基にして、表現を工夫すること。

#### ウ 表現の技能(観点3)

#### エ 鑑賞の能力(観点4)

・記の観点1、観点2が働いて外に現れる。

鑑賞の能力は、批評文や口頭批評等の評価方法を通して、外に表れるようにする。

### (3) 音楽科の「基礎・基本」

横浜市教育課程編成の指針には次のように記されている。

音楽活動は、人と人との豊かな関わり合いの中ではぐくまれ、自分を見つめ、個性を発揮し、同時に生きていることの喜びを感じ取ることができるものであるということに基づき、音楽科の三つの基礎・基本を次のようにとらえる。

#### ア 生き方の基礎・基本

豊かな音楽活動を経験することを通して、音楽に対する興味・関心や意欲を高め、多様な音楽に愛好する幅の広い価値観をもち、音や音楽に対する感性を深めて表現を追求し、音楽と共に生きていく態度や習慣を身につけることを生き方の基本とと

らえる。

#### イ 学び方の基礎・基本

音楽とふれあう機会や多彩音楽的発見の機会をとらえて、感動体験を積極的に求めていこうとする姿勢及び、将来的に音楽を追究していくきっかけや学習の過程を大切にして、表現方法を工夫しようとする活動を学び方の基礎・基本ととらえる。

#### ウ 知識・技能の基礎・基本

音色、リズム、旋律、音と音とのかかわりなどの構成要素と速度、強弱などの表現要素による構造的側面だけではなく、雰囲気や曲想といった音楽固有の感性的側面とのかかわりを含めた、豊かな音楽活動を行う上で必要となる能力を知識・技能の基礎・基本ととらえる。

アを受けて本校では、リコーダー、篠笛、ギター、打楽器などさまざまなジャンルの多種の楽器を体験させ、音や音楽に対する感性を深めると同時に、ジャンルの区別なく音楽に興味関心を持って取り組めるように指導を心がけている。選択授業ではさらにその幅を拡大し、興味関心の高い生徒がより深く学べるようにしている。

イを受けて本校では、合唱コンクールや儀式に向けての合唱練習などを通し、協調性を養い、よりよい音楽にするためにさまざまな表現の工夫をすることで、感動的な喜びが得られるよう指導している。選択授業では合唱だけではなく、器楽合奏、バンド演奏なども体験できるようにしている。

ウを受けて本校では、鑑賞授業などにおいて、音楽にはさまざまな記号や規則が存在するが、はじめから知識だけをつめこむだけのものにならないよう、まず自由な発想でとらえ、音楽をより生きたものにするために結果として記号や規則が必要になる、という授業展開を心がけている。

## 2 取組の経過

個に応じた指導で次の点に特に配慮した。

### (1) 歌唱

ア 羞恥心や自信のなさにより、表現ができない生徒が、取り組みやすい環境作りに努めた。

イ なかなか音がとれない生徒については個別に指導した。

### (2) 器楽

ア 個々にあった楽器を選択させ、演奏した。

イ リコーダーなど能力の個人差が大きなものは習熟度別に課題を与え取り組ませた。

### (3) 創作

ア 楽譜の理解能力により感性が発揮できない、ということがないように配慮した。

#### (4) 鑑賞

ア 文章表記が苦手な生徒には絵などを使って表現させた。

### 3 指導・評価にあたっての考え方・方針

音楽そのものは好きでも、音楽の授業というと堅苦しいイメージをもつ生徒が多い。まず、その先入観をとりのぞくために、ジャンルをとわず「音楽」というものは生きる活力を与えるものということを実感させたい。そのためには感性を大切にする授業展開が必要不可欠である。さまざまな音楽と触れあっていくうちに、どうすればよりよいものになっていくかを考えさせ、それに対して助言をしていく。それを繰り返し、総括したものを評価する。

### 4 指導・評価にあたっての具体的工夫

音楽をのびのびと表現するにあたって2つの壁がある。ひとつは読譜能力である。よい感性を持っているが楽譜が読みとれない、という生徒が多くいる。これに対しては読譜能力をつけさせるべく適切な指導を段階的に行っていくことと、読譜に時間をさかれ本来の表現力を発揮できないということがないように、読譜の補助をしていく工夫をしている。また、授業の中でリコーダーなどの楽器を用いるが、技術的な難しさによって興味を失う生徒がいる。これに対しては個人練習の時間をとり、習熟度別にパート練習をしたり個別指導を行うことで意欲を失うことのないようにしている。

### 5 今後の課題

#### (1) 評価について

授業時数が少ないので、1つの課題の重みが他の教科より大きくなる。より細かい評価基準が必要であろう。

#### (2) 楽器の確保

ギターなど台数の少ないものは交替で使用している。なるべく楽器に触れる時間が多くなるよう、楽器を揃える必要がある。